

## 治療内容別 通院スケジュールの一例

\*月経周期が28日で排卵日が14日目の場合の目安です。  
実際には個々の状況により異なります。

治療内容		月経周期																													
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28		
タイミング療法	排卵誘発なし																														
	排卵誘発あり			いづれか1日																											
人工授精	排卵誘発なし																														
	排卵誘発あり			いづれか1日																											
体外受精	自然																														
	低刺激			★																											
	中刺激			★	★																										
	高刺激			★	★	★																									
お休み周期	ホルモン状態の正常化や卵巣機能回復の目的でピルを使用します。周期前半から開始するカウフマン療法や後半から開始するピル療法などさまざまあり、来院日は適宜ご案内します。																														
専門外来(泌尿器科、着床不全、漢方)	専門外来(泌尿器科外来、着床不全外来、漢方外来)は、治療や生理周期に関係なく、医師の指示がなくてもご希望があればいつでもお好きな時期にご予約が可能です。																														

- … 排卵誘発の相談やお薬のお渡し。お忙しい方は前周期の段階で医師と相談し、先に薬を受領いただければこのタイミングでの来院は不要です。
- ★前… 排卵前診察にて排卵日特定をします。卵胞成長が遅い場合は再度来院の必要があります。
- ★… 排卵後の卵巣状態や黄体状態の確認が目的。周期によっては必要ない場合もあります。
- ★… 月経3日目(3日目が日曜日の場合は4日目)にホルモン検査と排卵誘発決定のための来院が必要です。
- ★… 中刺激、高刺激の場合は排卵誘発注射が必要です。注射の種類・量・頻度は個々により異なり、月経3日目にスケジュール表をお渡しします。  
【お忙しい方へ】自己注射やご自宅や職場近くの医療機関で注射する方法もあります。また月～木・土は21:30に来院注射も可能です。
- ★… 採卵します。この日に精子も必要となります。

## ★専門外来の予約

専門外来(泌尿器科外来、着床不全外来、漢方外来)は、治療や生理周期に関係なく、医師の指示がなくてもご希望があればいつでもお好きな時期にご予約が可能です。WEBからもお取りいただけます。専門外来の詳細についてはP.16 専門外来のご紹介をご参照ください。

## 35歳以上の方へ

## “卵子の老化について知っていただきたいこと”

卵子の質は年齢に応じ、確実に低下します。外見や脳年齢や血液年齢などは実年齢より若い女性がたくさんいらっしゃいますが、**卵子年齢は実年齢よりも若いということは絶対にありません。**(卵子は新しく生まれる細胞ではなく生まれながらに持っている細胞なので実年齢と卵子年齢は同じです)

男性の精子と女性の卵子の大きな違いは、精子は毎日作られ約72日という間で完成し射精されるのに対し、卵子は出生時に既に卵巣内に卵子を持っており、これを数十年保管しながら排卵していくので、時間=加齢が卵子の質の低下(染色体異常)を起こしてしまう点にあります。そのため女性の年齢は妊娠に大きく関係していると言えます。

35歳を過ぎると妊娠はますます難しくなると聞いたことがあると思います。その理由は多岐にわたりますが、卵子に関しては2つあげられます。

1つ目は、卵巣内に残っている原始卵胞数の減少によるものです。生きてきた時間=年齢とともに原始卵胞は消費されていきます。出生時には約200万個あった原始卵胞は35歳で残り約25000個を切ると考えられています。その後38歳で残り約5000個、40歳で残り約2500個と、どんどん閉経に近づいていきます。(閉経しても約1000個の卵胞は存在していると考えられていますのでゼロになることはありません)

2つ目の理由は、年齢とともに卵子の質が低下しているということです。**これが最大の原因です。**35歳の女性が排卵する卵子は、34年間卵巣内で保管された後1年間かけて排卵準備をしますが、34年間卵巣内で保管されている間に老化による染色体異

常を発生させている可能性が高いということです。35歳の女性の卵子染色体異常の発生頻度は約50%です。この染色体の異常発生頻度は35歳から急激に進み、36歳で60%、40歳以上で96%と考えられています。卵子の段階で染色体異常を有している場合、卵子が精子と出会っても受精しなかったり、受精しても受精卵分割が途中で止まったり、分割が進んでも着床しなかったり、着床しても流産したりすることで受精卵は赤ちゃんになることはできません。染色体異常を有したまま妊娠を継続する場合がありますが、その場合出生児はダウン症などをはじめとした染色体異常を持っています。ダウン症の出生率が女性の年齢上昇とともに高くなるのはこのためです。

女性の社会進出が進み、結婚年齢も上がり、医学の進歩に伴い寿命も延びました。しかし、妊娠に適した年齢は上がりません。卵巣と原始卵胞も自分と同じように年齢を重ねていることを正しく理解することが大切です。

\*本文は患者様にわかりやすい一部の説明を省略しています。

## 妊娠中期の母年に対するダウン症候群児の妊娠確率

母年齢	確率	母年齢	確率
20歳	1/1177	39歳	1/144
25歳	1/1042	40歳	1/87
30歳	1/704	41歳	1/67
35歳	1/299	42歳	1/51
36歳	1/239	43歳	1/39
37歳	1/189	44歳	1/29
38歳	1/148	45歳	1/22

出展: FBR  
(財)米国血液研究所